

PATRIOTIC GORE

戦争と文学

南北戦争と作家たち

by

Edmund Wilson

Translated by

Masaru Otake

HYORONSHA

戦争と文字

南北戦争と作家たち

エドマンド・ウィルソン

大竹 勝 訳

*



評論社

戦争と文学

昭和49年9月10日 初版発行

¥ 1,500

著 者 大 竹 勝

発 行 者 竹 下 み な

印刷所 三 倉 印 刷

製本所 株式会社 小林製本

発 行 所 株式 評 論 社
会 社

(〒101) 東京都千代田区神田神保町 2-16

電話代表 (265) 1961

振替東京 7294

落丁・乱丁は本社にてお取りかえいたします。

訳者はじがき

T・S・エリオット、バートランド・ラッセル、ライオネル・トリリングを経て、わたしの最近の関心はエドモンド・ウィルスン（一八九五—一九七二）に向けられてきた。その四人のなかで直接面識のあるのはトリリングだけであるが、過去十年間に、ウィルスンに対する評価は、アメリカにいて肌で感じたかぎりにおいては、必ずしも好意的なものではなかった。冷戦時代のアメリカで、ロシア系の女性を妻とし、四十年もロシア文学に精進していた彼に対して、政治的な雰囲気からでも、それは察しられないことではなかった。

また日本アメリカ学会の会報でも、彼がモダン・ランゲージ・アソシエーションが企画しているテクストの大改訂についてコストの点で批判したことについての記事が出ていた。その時、アカデミアとウィルソンの不和についてのニュースはついに日本まで達したかと思つたことであつた。

人は死んでみなければその評価は定まらないものらしい。直接的な利害が消滅し、その作家からもはや将来に期待することができないことがわかつたとき、われわれは今さらのようにその人の真価について考え始めるのである。今や彼は十九世紀におけるエマソンの位置を二十世紀のアメリカ文学界において占めるものとまで言われるにいたつた。

エドモンド・ウィルソンは『アクセルの城』（大貫氏訳・角川文庫）で日本に紹介されたのち、四十年近く翻訳されていない。そのへんのいきさつについては本書の跋文によってゆつくりご覧を願いたい。

アメリカの批評文学におけるニュー・クリティシズムの台頭によって、ウィルソンのような歴史的批評家は歓迎されなくなつた。それに左翼のレッテルをはられて、ついにアカデミアに足を踏み入れな

ったウィルスンは、むしろ時流に抗する街の学者という風貌すら見せていたのである。

そして今日彼は『フィンランド停車場まで』と『憂国の流血』の二大傑作によって不滅の名をかち得たのであるが、『憂国の流血』は十九世紀中葉の内乱とその文学を取扱っているばかりでなく、その「まえがき」に見られるように、この本は大国エゴが今日なお継統されていることを指摘する警告の書でもあるのである。それ故、わたしは特にこの「まえがき」に大方の注意を喚起したい。

また、このたびのウィルスン研究は、わたしに、日本ではついに定着しなかったF・スコット・フィッゼラルドを見なおさせることにもなった。しつとりとした、詩的な文体の持主で、純文学的八方破れの人生を送ったフィッゼラルドが、あれほどに遅しく時代と社会を直視し、風習や、資本家や、精神分析への関心を示して、知性的骨っほさを維持し得たのは、一つには、エドモンド・ウィルスンとの交友に負うところが大きかったのである。

『フィンランド停車場まで』は目下、ある少壮学者によって翻訳中と聞いている。このように、紙不足の時代にもかかわらず、エドモンド・ウィルスンのような作家が読まれる気運になって来たことはよろこばしい。

最後にこの『憂国の流血』Patriotic Goreの四分の一に及ぶ南北戦争時代の作家たち(改題して『戦争と文学』)の訳編に終始理解ある声援を下さった評論社社長竹下みな女史および編集長津山三郎氏に心から感謝の意を表したい。

一九七四年春

田園調布にて

大竹 勝

目次

まえおき	7
I ハリエット・ビーチャー・ストウ (HARRIET BECHER STOWE)	33
II シドニー・ラニア (SIDNEY LANIER)	95
III ジョージ・W・ケーブル (GEORGE W. CABLE)	121
IV アウル・クリーク橋上のアムブローズ・ピース (AMBROSE GWINNETT BIERCE)	177

V ジョン・W・デイ・フォレスト 195

(JOHN W. DE FOREST)

エドモンド・ウィルソンの生涯と作品 大竹 勝 279

きくいん 302

戦争と文学

アメリカ南北戦争の時代は、純文学の華かな時代ではなかったが、主として演説やパンフレット、個人の書簡や日記、個人的回顧録や新聞雑誌報告等等による驚くべき文献をつくりだしたことは事実である。一八六一年—一八六五年の歴史的危期に匹敵する大きさを持った危期で、これほど多くのひとびとがはつきりと意見を述べたことが他にあったであろうか。デモステネスやシセロを手本とした、チャールズ・サムナー Charles Sumner の念の入った式辞、指令書であると同時に挽歌でもあったリンカン独特の演説、牢獄からのジョン・ブラウンの書簡と法廷にむけての最後の弁論、グラント將軍のきつい、透徹した回顧録、それにジョン・モズビー John Mosby のほとんどピカレスクな回顧録、それに類する南北両軍の無数の士官たちの記録や弁明録、戦争にヒントを得て書かれた大部分の小説より遙かに想像的で暴露的であったメアリー・チェスナット Mary Chesnut の才気あふるる日記や、あの歴史的に内向的な一門の四世代目のクールなしかも注意深い解説とも言うべきアダムズ兄弟の自伝——そのようなものもろの記録文書は詩人や小説のよく成しとげ得なかつた程にこの戦争を劇的にとらえているのである。

この劇は自分たちの役割を書き記した人物たちによって既に上演されたのであって、その文献の特異

な魅力は、むしろそれをいつまでも読み続けさせるものであるが、同一の物語が九人の別々の人物の観点から語られている詩人ブラウニングの『指輪と本』の魅力にも似ている。われわれはチェスナット夫人の日記のなかで、南軍のフッド將軍が「バック・プレストン」という美女に対する失恋のことを読む、それからわれわれは北軍のシャーマン將軍の回顧録の中で再び彼に出会うのであるが、彼はアトランタ占領の際に、北軍侵入兵たちの残酷なしうちに抗議し、シャーマン將軍と論争したとある。

さらにわれわれはフッド將軍自から自分の回顧録を書いたことを発見するのである。フィラデルフィア生れのニグロ女教師シャーロット・フォートンとボストンの名門の出であるトマス・ウェントウォース・ヒギンソンとはサウス・カロライナ海群島で一緒に過ごした時代の詳細な記録を二人共残したことがわかった。リンカンにしてからが、彼の法律事務所のパートナーであったウイリアム・ハーンドン、アメリカに帰化したフランス人マルキ・ド・シャムブラン、南軍政府副大統領アレグザンダー・H・ステイヴンズ、それに若い北軍大尉であったオリヴァ・ウェンデル・ホームズたちによって見られた場合、それぞれ何と違った人物に見えたことか！ グラント將軍もヘンリー・アダムズとチャールズ・フランシス・アダムの両者に何とひどく違って見えていることであろう！ そして十九世紀には、われわれの世紀より自然なことであつたように、各自が性格に適わしく話しているので、屢々殆んどその人の声を聞いているような気がする。マックレラン將軍が、自分の交代となつた総司令官ヘンリー・W・ハレック將軍との会見の後で妻に前線から手紙を書き送つて「やつはろくでなしで、紳士ではない」と書いているのは、南軍のフォレスト將軍がマーフリーズボロで大勝利を収めた時に質問に答えて、早道をして「おっとり刀で」「多勢をもつて」そこへ一番乗りをしたからだと言答したのにまげず面白い話である。

この本は南北戦争を生きぬいた約三十名の男女を描いているのであるが、あるものは戦争に関連して特殊な役割を演じており、あるものはある興味深い方法で戦争の衝撃を体験し、ある角度から、またある一面について個人的記録を残しているのである。わたしは主として彼等を彼等の直接の人間関係と彼等の時間と場所とにおける価値の点から述べたのであって、一般論を避けて、経歴と人物に戦争そのものの道徳を示唆させようと努めた。しかし、この戦争の描写を形勢する一般的な見解を前もって読者に説明するといういくらかの責任を感じている。

わたし自身二つの世界大戦を生き抜いて来て、多少とも歴史を読んでいるので、最早各国が行う「戦争目的」の宣言を本気でうのみにする訳にはいかない。わたしの考えでは、歴史家や政治家たちが、生物学的、動物学的現象に滅多に興味を持たないというのは重大な欠点である。最近のウォルト・ディズニーの映画で、海底の生物を見せていたが、なまこと呼ばれる原始的有機体とその肉体の一方の大きな口から自分より小さな有機体を飲み込んでしまうのが見られた。自分より少しばかり小さなもう一つのなまこに直面して、それもむさぼり食うのである。

そこで、人間が戦う戦争は、原則として、本来なまこの貪婪さと同一な本能に刺激されているのである。人間以外の動物の間では人類が発達させたような類の組織的侵略を発見することは困難であることはもっともである。それに匹敵するようなテクニークを修得したのは戦争蜂くらのものである。しかし狒々は群居して行動し、小鳥は梟に集団攻撃をかけることがあり、蜜蜂は巣を防衛する。類人猿は今では哺乳類のうちでは最も喧嘩好きでないものの一つになっているようである。彼は家族の樹木に棲み、他の者の家庭を邪魔することはしない。しかし原始人は自分の家庭を衛るために闘わねばならなかった証拠がある。

いづれにせよ、この点についての人間と他の生物との間の相異は人間の彼のいわゆる「道徳」とか「理性」というものを十分に備えることに成功して、彼の「有徳」とか「文明」とか言うところのものに関連して、自分のしていることを正当化するに到ったということである。そこで、彼が闊い他を併呑する場合に揚げる自己主張の雄叫びは取りもなおさず栄光と神の讃歌となり、民族理想の演説となり、理論的イデオロギーの示威運動となるのである。

これらの主張はひとたび戦争が始まったら滅多に意味を持たなくなる、すなわち、持っていた意味を急速に失ってしまうのである。われわれの世紀においてドイツ人は侵略的拡張の一番単純な種類を示した。一九一四年の戦争において、彼等は「生活圏」を必要とし、「ドイツ文化」を普及させるという使命があるとの口実でフランスとベルギーに侵入した。そしてヴェルサイユ条約の手も足も出ない罰則は再び彼等をヨーロッパ中にあばれさせ、彼等は自からを「支配者民族」と呼び、それは人類を統率する使命を持つものであるとした。

ところが、有効な革命を成しとげればかりのある民族の場合には、事情は少しばかり、もっと複雑である。そのような民族が叫ぶスローガンは、それが将来に樹立しよう并希望する、より自由でより幸福な社会への熱望は言うまでもなく、それを侵食して来た他のグループまたは国の桎梏からのがれることに成功したある社会グループかまたは国の側における本当の歓喜を初めは表明するかも知れない。そのような民族は最初は内乱を戦い、それから支配権力であったものが追い立てられたあとで、なおも追放された権力と共同の主義を持つ、他のまだ安定した政体によって未だに支持されている旧政体に逆行することから革命により樹立された新社会を防衛する必要を見出すのである。

しかし、ひとたび反乱政党がそれ自身の権力を押しつけることに成功し、もっと前進するだけに自力

があると感じる時には、それは出来るかぎり喰いつくして、そのスローガンはすべての意味を失うのである。フランス人による彼等の革命の防衛はナポレオンの征服と化した。ロシア人による彼等の革命の防衛は拡張の欲望と化し、それは、「帝国主義」を憤慨して弾劾しながらも、バルカンやバルト諸国や中央ヨーロッパの諸国を併呑するにいたったが、そのことは帝政ロシアが時としては平和的手段で、また時としてそうでなく旧ロシア帝国を構成していた数多の民族を併呑したのとまったく同様であった。ナポレオン時代のフランスは彼等の革命の理想たる「自由」、「平等」、「友愛」と同様「栄光」を誇りとして、国歌マルセイエズに両者を背負わせたのである。ロシア人は世界の他の全部を「人民の民主主義」に転換することによってそれらの国々を救済する使命を遂行するためにロシア人を選んだ必然的歴史過程の手段であるふりをし続けて来た。そして今や合衆国のアメリカ人は、これまた革命の成功を自讃している孫の代であるのだが、われわれもまた拡張の欲望によって、これらの戦闘的まやかしの標語に、「アメリカの夢」とか「アメリカ式の生活」とか「自由世界の防衛」とか言う用語を加えているのである。

しかしながら、われわれアメリカ人もまた貪食漢であり、まやかしの標語を語っていることを認識することはもちろん非常にむずかしい。もしわれわれが現在われわれの国が演じている役割の種類を本當に理解しようとするならば、われわれは、過去におけるわれわれの傾向と実践とがどんなものであったかということをはひるがえって客観的に見ることに努めねばならない。

近代のフランスとソ聯に似て、王権の代理人たちを追放してわが国の存在を宣言し、それが達成されたとすぐに拡張の過程が始まった。これは、インディアンとの抗争（この問題については後で触れる）があったにはあったが、しばらくはとにかく平穩であった。われわれはルイジアナをフランス人から買い、

フロリダをスペイン人から買った。テクサスの場合には、まだスペイン統治下のメキシコ領であった時にそれを植民地化し、メキシコから買うことを提案したが、メキシコ人は売ろうとしなかった。合衆国から来た植民者たちは結局メキシコ人を追放し、独立した共和国をうちたて、それは後で合衆国の一部分となった。イギリス人とはわれわれはオレゴン領域を取り込む交渉を妥結したのであるが、比較的に手腕のないメキシコ人に対しては次第に高びしやに出るようになった。われわれはメキシコの数ある革命でなくなったアメリカ人やメキシコで射殺されたアメリカ人の所有する財産の莫大な代償の支払を要求した。われわれはこの負債をリオ・グランデの北に位置する領土でわれわれがテクサスの一部分と主張したところをわれわれにメキシコが割譲することでこの負債を相殺するように提案し、カリフォルニアを買取することに努めた。ところでカリフォルニアもまたメキシコの一部であったのだが、その北部は合衆国の開墾者がすでに定住していたのである。メキシコ人はこの両方を拒否し、ポーク大統領はリオ・グランデの北の領域を占領するために軍隊を送ることによって即答したのである。メキシコ人は領土の防衛を行った。合衆国は宣戦を布告し、メキシコに侵入し、首都を占領し、武力をもってニュー・メキシコ、カリフォルニアおよび未定住の西部の全域を占領した。これはメキシコが初めに所有していた領土の半分以上に及んだ。メキシコ政府はやむを得ずわれわれと条約を締結し、それによってメキシコが取られた領土の代償としてわれわれは一千五百万ドルを支払うことで合衆国が主張してやまなかつた責任から解放されることになったのである。

メキシコ戦争を正当視しようとした感情は、南カリフォルニアの小説家であり政治評論家であったウィリアム・ギルモア・シムズ William Gilmore Simms (1806-1870) が一八四七年にサウス・カロライナ選出の上院議員ジェームズ・H・ハモンドに送った書簡の抜き書きによって例照されるであろう――

『貴殿は軍事的栄光を批判してとやかく言つてはなりません。戦争は近代文明の最も偉大な要素でありまして、われわれの使命は征服にあります。まことに、一国が支配権の拡張をやめるならば、低劣ではあるがもつと精神的な近隣人のえじきとなりましょう。メキシコ人は神がまず狂わせて滅亡させようとしているひとびとの状態にあります。彼等はわれわれがやむを得ず征服するように最善を尽しているのです。今やそれ以外のことは何も出来なくなりました。わたしの言っていることをよく聞いて下さい——わが国民は獲得した土地を一寸も譲らないでしょう。それには、あまりにもはつきりとアングロ・ノルマンの血筋が通っているからです。多分われわれはそのために代償を払うでしょうが、それは予定経費のなかから出されるのであって、われわれが蒙つた征服の損害についてのみであります。』

次の段階は南部諸州が連邦国家から脱退して彼等自身の共和国を樹立しようとした時、それら諸州を抑制したことであつた。その途中で、ついでに言うならば、カナダ人はワシントン政府（連邦政府）の次に烈しさを増す攻勢におそれをなして、さまざまの州を統一された連邦組織に結合する段取りに始めて取りかかることになつたのである。奴隷を所有した南部諸州と急速に産業化した北部とはその頃までには画然と差がついてきたので、二つの別の国だと言つてもいいくらいなものであつた。両者はまるで對抗する二つの権力単位——どちらも他を犠牲にして拡張しようとしていた——であつて二つのヨーロッパの国と変るところはなかつた。脱退から南部を阻止したワシントン政府の行動は屢々考えられて来たような動機によつて促進されたものではなかつた。それが奴隷を開放するための闘いであつたという話は、南部を除いて、かたくアメリカ一般人の心にいたるところで定着されており、南部諸州の奴隷制度は、北部ではもとより南部にあつても多くのひとびとにとつて困つたことであつた。

しかし、同様に多くのひとびとが南部においてはもとより北部でも奴隷制度を心から認めていたので

ある。ホイットティアやギヤリスンのような奴隷廃止論者たちは、サウス・カロライナに居たとした場合ほどに命にかかわるほど危険ではなかったが、両者ともニュー・イングランドで暴徒に襲われ、ホイットティアのほうはフィラデルフィアで新聞社の事務所を焼かれたのであった。このような熱狂者たちは南部反対の共和黨員によって相当慎重に取扱われたものだが農園主たちの極悪さを利用することは第一次世界大戦の緒戦においての、いわゆるベルギーにおけるドイツ軍の残虐のようにプロハガンダの一つの型となった。

この頃までには北部諸州がすでに取り除いてしまっていたところの奴隷の制度は、このようにして北部の極端な連邦主義者に葛藤をメロドラマに見せるといふあらゆる近代戦争に必要な、扇動的な道德問題を提供したのであった。脱退の悪について言うならば、ニュー・イングランドにしてからが、一八一二年の戦争当時、イギリスとの貿易が停止された時、脱退の極悪さについて討論したのであった。

しかし、これらのにせよ、道德問題は、かくも猛烈な憎悪をおこさせたところのものではあったが北部にとつては基本的なものでは決してなかった。ワシントン政府が南部を強制し粉砕することを可能にしたのはその目的の正義によるものではなく、それが動員可能であつたより優秀な装備と組織化についてのより優秀な能力によつたのである。

北部の連邦保存の決意は権力の進撃が取つた形式に過ぎなかつた。統一の衝動は十九世紀には強かつたが、それは今世紀に続いて、われわれの時代との関連における南北戦争の意義を把握するといふのであれば、われわれはエイブラハム・リンカンをそれに類似する難業に従事した他の指導者たちとの関連において考慮すべきであらう。

このような指導者たちの主なるものはビスマルクとレーニンであつた。リンカンと共に彼等は三つの